

第二百七話 赤い将軍？

某大先輩から、「赤い将軍」を知っているかと問われ、寡聞にして承知して居らず、気になっていた。件の将軍は、「日中 15 年戦争と私」を著した陸軍航空本部総務部長、航空兵器総局長を務めた陸軍中将遠藤三郎である。

戦後、軍歴にあった者の多くは、その経験を活かして各企業等に勤めたのであるが、遠藤中将は極めて異色の活動をしており、それ故に「赤い将軍」とも呼ばれたのである。

中将迄、功なり勤め上げた人物が、何故に大変身したのかを関係文献等に依って辿ってみたい。エリート軍人の心の軌跡は興味深い。

1 遠藤中将の戦後の動向

- ・敗戦に際しての声明「軍隊はなくとも良い」
- ・旧知の東久邇首相との面談で、「軍隊がなくなることは日本の黎明であり慶賀すべきこと」と訴えた。
- ・日本国憲法制定「己の悲願が明文化」と喜ぶ。
- ・入間の旧航空士官学校跡地に開拓農民として入植
- ・警察予備隊発足に伴い、執筆や講演で全国行脚
- ・片山哲氏、有田八郎氏と共に、「憲法擁護国民連合」の結成に参画
- ・1955～1972 訪中五回 毛沢東や周恩来と会談
- ・「元軍人訪中団」(後、「日中友好元軍人の会」)を組織

昭和 59 年死去享年 91 歳

陸士同期生会から除名

2 経歴(狭山市 HP 等から抜粋)

山形県小松町出身、陸士 2 6 期、陸大卒 砲兵。参謀本部作戦課、フランス駐在・陸大留学、陸大兵学教官、関東軍参謀副長、S14 年陸軍少将、陸軍航空士官学校長、S18 陸軍航空本部総務部長、航空兵器総局長官、S22 巢鴨入所、23 年出所

その後、埼玉県入間郡入間川町(現在の狭山市)の陸軍航空士官学校跡地に入植、農業に従事した。

生来、性格がやさしく、しかも強いものには屈服しない不屈の精神をもつ遠藤は、常に自分の意見を持って上司と渡りあい、そのために一時は左遷される憂き目にも遭遇した。陸軍少将に進級後、ノモンハン事件直後の関東軍参謀副長として派遣されたが、遠藤はその被害の大きさから、現在の関東軍ではソ連軍に対抗できないと悟って、北進論よりも満州防衛を優先するように主張して戦略爆撃の中止を主張した。

“日清戦争での遼東半島や台湾割譲要求は誤り”と講義し、航空士官学校長時代には、天皇神格論に批判的だったとされる。仏からの帰朝報告に「汎欧州主義」、軍縮会議に軍備漸次撤廃論など、物議を醸した。

紙の残した膨大な日記は、狭山市立博物館が所蔵している。

3 遠藤中将の思想転換

3 年間の仏留学(1926～29)間に、「世界連合の思想」に接し感銘を受け、WW1 での戦争の悲惨さを実感したようだと言われる。

*若干の所見

大尉から少佐時代の体験が、氏に根本的な思想転換を齎したもののようだ。然し、同様の体験をした者は彼一人に限らない訳だし、彼だけが真っ赤になったのには性格的なものもあったのだろう。信念・不屈の人との評には同意だが、理想論や情のみでは少なくとも武力組織の一員たりえない。それらを超越した所に軍人の生き様があると思うのだが・・・遠藤中将は「時は歴史を美化する」と述べたという。何れにしても稀有な人物だ。

(第二百七話 了)



(wikipedia)